

東中国

将来的東中国教区宣教に関する
骨子を承認

第72回東中国教区定期総会は5月22日に一日目はオンライン、5月29日は選挙のために2会場に分けてのハイブリッド形式で執り行われた。一日目は各種議案についての協議、採決を行った。協議された中で大きな議案は将来的東中国教区宣教に関する件である。これは高齢化や過疎化が進む中であって、それに伴う教区としての宣教の在り方を改めて示していく

骨子①は各教会、教区の各部にてオンラインでの宣教活動をする際にサポートしていくチームである。コロナ禍により教会のオンライン化が加速した。教区にとってこれは有益な手段の一つであるが、技術的、心理的に躊躇するケースがいくつか確認されている。その部分をサポートするためのチームを編成し、宣教のために動いていくのがこのチームの役割である。

骨子②に挙げられているサポートチームは、オンラインではなく実際に現地に向いて会堂の草抜きや敷地の整備を支援していくものである。これは用地整備だけではなく、現地で顔と顔を合わせることによって交流し、共に祈り合うことを目的としている。

骨子③は教区として宣教研究を担う部署である。オンラインと現地での宣教活動をもとに、それらを活用しながらより具体化し、発展する可能性を模索するために設置される。

骨子④はこれまでの予算の在り方を再度協議するためのものである。現在教区の予算は完全に縦割りにによって運用されている。それらを横断的に用いていくために協議していく。

上記4つの将来的東中国教区宣教に関する骨子が出され承認された。2023年度よりこれらのチームが動いていくことになる。

関東

教区活動方針、根本的な対策を検討

第73回関東教区総会が、5月30、31日にかけてさいたま市民会館大宮レイボックホールを会場に行われた。総会開会に先立ち開会礼拝がもたれ、小林祥人教師(取手伝道所)がエレミヤ書から御言葉の励ましを語った。

一日目午後には、横内純氏(高田教会主任担任教師)、平澤巴恵氏(春日部教会担任教師)の准允式が、熊江秀一議長のもと執り行われ、新たな教師の誕生に喜びを共にした。

引き続き議事に入り、2022年度諸報告承認の件が上程され、議長報告がなされた。コロナ禍の中、各教会において、地区・教区において

も、少しずつ活動が再開されつつあることが報告された。その一方で未だ2020年以前レベルの教勢回復には至っていないため、新型コロナウイルス感染症対策支援制度として三本柱(①教区教会

負担金の一律8%減額、②教会活動支援、③謝儀支援)に取り組んだこと、関東教区謝儀互助の原資となるナルドの壺献金

は、目標額1200万円には到達しなかったものの、1177万7499円が献けられ、用いられたいことが報告された。なお、2023年度のナルドの壺献金は今年度と同額1200万円を目標額とする

二日目には、教団問安使藤盛勇紀教団副議長を迎え、教団機構改定に関する協議会が持たれた。

飯塚拓也(竜ヶ崎)常置委員選挙結果【教職】町田さとし(初雁、栗原清(武蔵豊岡)、佐野明子(塩谷一粒)、嶋田恵悟(土浦)、武田真治(上尾合同)【信徒】金刺英雄(上尾合同)、半田香代子(原市)、豊川昭夫(越谷)、佐久間文雄(志木)、横坂幸子(新潟)(小池正造報)

東海

「神の恵みの選びに
を主題に」

第110回東海教区定期総会は、5月30、31日にかけて、池の平ホテル(長野県北佐久郡立科町)を会場に開催された。開会時の議員数は、正議員202名中136名、准議員9名。

開会礼拝では、宇田真議長による説教「キリストにおける選び」(詩編65編1-5節、エフェソの信徒へ手紙第1章3-7節)が語られ、聖餐式

が執行された。議長報告の中で宇田議長は、「第二次五力年計画」の初年度主題「恵みにより召されたる者の集いとしての教会」に基づき、教区・分区の多くの集いが実施されたことを感謝した。

この「第二次五力年計画」は、「神の恵みの選び」を目標とし、共に「キリストの体である教会をたてる」ことを願い、「神の恵みの選びに応答すること」を主眼とし、前年度の教区総会で可決された計画である。

今年度より、「総会議案報告書」の巻末に、教区内6分区の規則が掲載されたが、このことも、教区全体として各分区の働きを共有し、共に教会をたてることの二環として行われた。

今総会の重要議案として、四役選挙が行われ、共にキリストの体なる教会をたてる一年が始まった。

四役選挙結果【議長】宇田真(岩村田)、【副議長】柳谷知之(松本)、【書記】新里正英(三島)、【伝道委員長】穴戸俊介(愛宕町)常置委員選挙結果【教職】兵藤辰也(中遠)、石井佑二(遠州)、宮本義弘(沼津)、横井伸夫(長野)

【信徒】土屋芳子(長野県町)、新庄田鶴子(静岡草深)、森里光生(遠州)、林信孝(松本)(新里正英報)

29日はハイブリッド形式で



倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室)

倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室)

倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室)

倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室)

倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室) 倉敷教会会場(放送室)



按手礼式



広い会場で間隔をとって

▼教育委員会▲

クリスマス献金、配分額を決定

第2回教育委員会が、6月12日にオンラインで開催された。まず、2022年度に全国諸教会、学校、幼児施設等から献げられたクリスマス献金の配分額について話し合われ、特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン(ウクライナの子どもたち)に200万円、学校法人アジア学院に100万円、北海教区アイヌ民族情報センターとアイヌ奨学金リスト教協力会に100万円、東北教区放射能問題支援対策室に150万円をそれぞれ送ることを決定した。また2023年度のクリスマス献金送付先として、引き続き、チャイルド・ファンド・ジャパン(ウクライナの子どもたち)に200万円、学校法人アジア学院に100万円、北海教区アイヌ民族情報センターとアイヌ奨学金リスト教協力会に100万円、東北教区放射能問題支援対策室に150万円をそれぞれ送ることを決定した。

▼伝道委員会▲

教区伝道委員長会議を対面で開催予定

第2回伝道委員会が6月6日にオンライン(ズーム)で委員全員が出席して開催された。中西真二伝道委員長による開会礼拝の後、まず関係委員会・担当者の報告を受けた。伝道委員は分担して宣

会」については、今回はオンラインで開催することが決定されたが、詳細の決定には至らず、6月中に改めて本件に特化した臨時委員会を開催することとした。2024年2月に開催予定の教区教育担当者会については、訪問学校の第一候補であった横浜英和学院の承諾を得られたことが報告された。詳細

「宗教二世問題」で講演
去る6月14日、15日に教団でカルト問題全国連絡会が開催された。コロナ禍で往來の叶わなかった韓国PCKの教会の方々と久しぶりの会であった。今回の連絡会は、一日

して扱うことの限界と問題を指摘され、韓国におけるカルト的団体、特に「摂理」や「タラップ」と呼ばれる宗教活動への警鐘を鳴らされた。卓教授はまた、韓国に在住している約1万2000人の日本人のうち、約7000人が統一協会員であることを指摘され、その中で二世を含め、その家庭の崩壊や、やめるにやめられない信徒たちへの対応が必要であることも語られた。

2. 開拓伝道援助運用に関する件
新報に掲載した第1回委員会報告では、2023年度開拓伝道援助申請について一律申請額の50%の援助とせざるをえなかったことを報告した。この状況を改善するためにまずは伝道委員会内で運用に関して協議を始めた。その年度の創立記念日献金・開拓伝道援助献金の合計と申請件数によって年度により援助割合に差がでることが現在の課題。なるべく公

平になるよう運用の検討を続ける。なおその一環としてコロナ禍のため事前に実施できなかった2023年度申請教会・伝道所5カ所に対してオンラインも併用しながら問答することとした。牧師、信徒から直接声を聞き、事業の進捗状況や必要を確認する。



続いて、韓国PCK側から「宗教二世問題」と題して卓志一教授による講演がなされた。卓教授は韓国におけるカルトの歴史的経緯と実情について語られ、宗教二世の問題を単なる「異端」として扱うことの限界と問題を指摘され、韓国におけるカルト的団体、特に「摂理」や「タラップ」と呼ばれる宗教活動への警鐘を鳴らされた。卓教授はまた、韓国に在住している約1万2000人の日本人のうち、約7000人が統一協会員であることを指摘され、その中で二世を含め、その家庭の崩壊や、やめるにやめられない信徒たちへの対応が必要であることも語られた。

(坂田 進報)

教区議長コラム

◆ 京都教区 ◆

今井 牧夫

て、普通の人はまねできない「素晴らしい信仰」の話だと理解してきた。しかし、最近の大きな社会問題である宗教の問題、様々な論じられているが、極端な

言を透かせて気づかせて

多額献金の宗教方策によって、信徒の家庭関係や家族の学校生活などが破綻する問題が、この箇所を読みつつ脳裏をかすめたとき、それまでと全く別のことを感じてしまった。この話は、その後、続く神

生活費をすべて神殿に献げる社会の現実をどう思うか、ご自身の言葉を聴く者たちに問うておられるのだろうか。貧者が生活費をすべて献げる「素晴らしい信仰」の背景には、そうまでせざるを得な

事務局報

岡山孝太郎(隠退教師)



22年4月26日逝去、88歳。広島県生まれ。60年同志社大学大学院修了。同年より大阪、前橋、別府野口、向日町教会を牧

会し、99年隠退。遺族は娘・岡山佳穂子さん。永口裕子(無任所教師)



23年6月2日逝去、66歳。大阪府生まれ。11年関西学院大学神学部卒業。12年より北白川、播磨新宮、喜連自由教会を

菊地惟晃(隠退教師)



23年6月6日逝去、89歳。東京都生まれ。71年関西聖書神学校卒業。75年より西那須野、新井、桃山、四日市教会を牧会し、07年隠退。遺族は息

教会所在地変更
脇本 二 010-0342
男鹿市脇本脇本字中野 36-11

お詫び・訂正

新報4997・98号4面「事務局報」欄、美馬牛福音(就(兼担)齋藤麻実)を「辞(兼担)齋藤麻実」に、お詫びして訂正いたします。

出版局よりお知らせ
出版局の7月の休業日は、7月14日(金)です。

伝 道 報 告

伝道の
TOMOSHIBI ともしび

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。…イエスは言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」
ルカによる福音書第10章17節～20節

「シオン保育園」と「隠岐教会」

シオン保育園園長・隠岐教会牧師 大野 光信

上、シオン保育園
下、隠岐教会

1958年3月に隠岐諸島の中ノ島(海士町)において伝道開始、その5月に隠岐伝道所を開設、8月に隣の島の西ノ島(西ノ島町)の方々より幼児施設設立の依頼があり、協議を開始する。そのために隠岐伝道所を西ノ島に移し、保育園舎建築が始まる。1959年11月に「シオン保育園」を開設、1962

年に「シオン子どもの家」(児童クラブ)を障がいのある子どもを中心に開設(2018年3月まで)、2003年10月に精神障がい者グループホーム「ハイッ・シオン」の開設、2004年10月に精神障がい者小規模通所授産施設「ごさいな」(障がい者サービス事業所)の開設、2008年4月に地域子育て支援センターの開設と続く。

その地域の方々の要請にこたえる形で、1998年に「シオン子どもの家」(児童クラブ)を障がいのある子どもを中心に開設(2018年3月まで)、2003年10月に精神障がい者グループホーム「ハイッ・シオン」の開設、2004年10月に精神障がい者小規模通所授産施設「ごさいな」(障がい者サービス事業所)の開設、2008年4月に地域子育て支援センターの開設と続く。

年9月に社会福祉法人シオン保育所(シオンの園)が設立される。このようにして今日まで、隠岐伝道所(隠岐教会)と共に歩んできた。シオン保育園は「平和を作る」ことを中心に据え、現在まで保育に携わってきた。子どもたちが平和を作る人として歩むことが出来るようにと。

その地域の方々の要請にこたえる形で、1998年に「シオン子どもの家」(児童クラブ)を障がいのある子どもを中心に開設(2018年3月まで)、2003年10月に精神障がい者グループホーム「ハイッ・シオン」の開設、2004年10月に精神障がい者小規模通所授産施設「ごさいな」(障がい者サービス事業所)の開設、2008年4月に地域子育て支援センターの開設と続く。

止揚学園創立60周年

優しい思い出は
未来を照らします

5月27日、止揚学園創立60周年記念式典「思い出が照らす方へすすむ会」が行われた。5月13日と2回に分けて行われた式には、合わせて500名が集められた。

止揚学園は、同志社大学神学部を卒業した福井達雨さんが、知能に重い障がいがある4名の仲間と共に歩み出したことにより、始まり、現在は福井生(いくる)園長が引き継いでいる。

礼拝では、小原克博教授(同志社大学)が「この最も小さい者たちの一人に止揚の力が向かう未来」(マタイ25・31〜46)と題して話した。先

ず、世が多数に目を向ける中で「最も小さい者」に眼差しを注ぎ続けた達雨さんの歩みは、時に周囲の人々とぶつかり合いを引き起こすものであったことを振り返った。その上で、「止揚」とは何かについて語り、「学園が、障がいがあるとされる者と無いとされる者がぶつかり合って新しいものを生み出して行くことを宿命づけられており、その働きは障がいという概念を必要としなくなるまで続く」と語った。

続いて、福井光子理事長が小さな輪から始まった働きが多く人々に支えられ大きな輪となったことに感謝を述べた。また、辻昌宏社長(近江兄弟社)が近江兄弟社と止揚学園の交流を紹介し、「これから共に歩んで行きたい」と挨拶した。

第2部では、止揚学園の仲間たちが、学園の歩みを紹介し、会場は温かい拍手に包まれた。また、福井園長が「優しい思い出は未来を照らします」と題して記念講演を行った。仲間たちと共に過ごして来た思い出を振り返り、「全てを委ねて来る仲間たちとの温かい思い出に包まれた時、自らの方が形を変え、命が活き活きと生きる場にはまりこんでいた」と語った。また、この関わりを守り続けて行く決意と共に、支えて来てくれた人々への感謝を述べた。

(新報編集部報)



大村 直子さん

「主は私の羊飼。私は乏しいことがない」



三田教会員

大村さんは3歳の頃、祖父母に連れられて霊南坂教会の教会学校に出席し、また近くの教会の幼稚園に通った。牧師が温かく迎えてくれた体験が、後に幼稚園教諭になりたいたの思いにつながった。

母から、「神さまは全てを備えてくださる」と繰り返し聞かされていた大村さんは、神さまに委ね、与えられたものを受け入れることが多かった。大学卒業時、はじめて自身の人生について真剣に考える機会を得、その中で、教会に根差して歩むべく信仰告白をし、学科長から勧められた仕事を断り、キリスト教主義の幼稚園に就職した。

結婚して川崎市の三田に住

むようになった。後に三田教会となる家庭集會が始まり、大村さんは幼い娘をあやしながら、集會の案内はがきを作る等の奉仕を担った。また、自宅で絵本の読み聞かせ会を催し、そこから教会学校につながる子どももいたという。

40代半ばの頃、『信徒の友』の編集委員を引き受け、以来26年、編集委員長になり13年が経つ。3か月に1回、編集委員会を開き企画し、毎月の編集会議で内容を練っていく。その中で、信徒に身近な話題だけでなく、旧約統編や他宗教のことなど幅広い学びを与えられた。委員やスタッ

フが篤い祈りを持って取り組んでいる働きの中に加えられ、感謝している。

2006年からNCC書記を担った時には、他教派との関係や世界の教会との繋がりを実感した。今、世界では分断が進み、その波がキリスト教界にも広がっている、との危機感を持っている。「言葉を紡ぎ、繋いで来た教会が、倦み疲れることなく次代に継いでいくために、教師と信徒が共に言葉を発信し続けていかなければならない」と語る。「主は私の羊飼。私は乏しいことがない」(詩編23編)に励まされて歩んでいる。

今年度は、ほぼすべての教区で、広い会場を用いたり、全体の時間を短縮するなどのコロナ感染防止対策をし、皆が集まって教区総会が開催された。

そのいくつかの教区総会に赴くことができたが、多くの教区において、教区内における宣教協力や、教会支援および教師謝儀互助(保障)等について、時間をかけて議論がなされていたことが強く印象に残っている。

教憲に、「本教団はその教会的機能および教務を遂行するために教区を置く」(第6条)と

あり、「教区は本教団所属教会の地域的共同体であって、教区総会をもってその最高の政治機関とする」(同)とある。これは、教区の役割は、教区内の教会・伝道所、関係学校・団体・施設が共に立ち、活動を継続することとを担うということだと思えるが、まさにそのような具体的な課題に取り組むための熱心な

教区(地域的共同体)の役割

議論がなされているのである。財政的に困難な状況にある教会・伝道所の支援、兼務・代務を担っている教師に対する支援、地域における固有の課題との取り組みなど、教区内における伝道の展開のために、真剣な話し合いがなされている様子をあらためて見聞きし、胸が熱くなった。

いくつかの教区で、教区の働きを担う方たちが新たに選出された。その方たちの健康と働きが守られることを祈っている。

(教団総会議長 雲然俊美)